

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1970101844		
法人名	社会福祉法人ひかりの里		
事業所名	グループホームめだかの学校シニア		
所在地	甲府市武田1丁目2-23		
自己評価作成日	平成23年10月15日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/Top.do?PCD=19">http://www.kaigokouhyou.jp/kaigosip/Top.do?PCD=19</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	山梨県社会福祉協議会		
所在地	甲府市北新1-2-12		
訪問調査日	平成23年12月9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>児童養護施設との併設施設のため、子どもとの交流を行い相互への刺激となっている。甲府駅に近いという事もあり、外へ出かける行事をさかんに行っている。三人くらいの利用者者と職員と好きな所に出掛ける個別外出も行っている。家庭的な雰囲気を大事にして、その人らしく生活出来るように心掛けている。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>利用者と職員が共に楽しみながら日常生活を過ごしているが、介護のプロとしての支援を実践している。武田通りに面した商店街の中にある立地環境を活用し、元気で明るい利用者の表情が印象的である。7年間のグループホームの運営の経験を活かした、対応や気配りなどさまざまな点で改善や工夫がされている温かい事業所である。</p>
--

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き生きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

事業所名 グループホームめだかの学校 シニア

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名( )	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
<b>I. 理念に基づく運営</b>						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域と密着したケアを心がけ、利用者を閉じ込めたり、孤独にならないよう意識してケアにあたっている。会議等で職員にも周知徹底している。	玄関を入ったところに、理念が掲げてある。毎月の職員研修・職員会議で振り返り、職員と利用者が共に楽しむ日常、とプラス思考の発想での支援に努めている。職員は人生の大先輩である利用者に対し、自分で出来ることは自分でするような介助支援を心がけている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域行事に積極的に参加したり、運営推進会議などを活用して意見交換に努めている。地域のお店を買い物等で利用するようにしている。	平成17年からこの地域で活動しているので、地域住民も気軽に話しかけてくれる。文化祭、餅つき、敬老会、クリスマス会など、住民を招待したり招待されたりしている。自治会にも入り、地域の認知症の研修会に講師として出席している。法人のほかの施設の見学会にも参加してもらっている。	地域の文化祭に参加の折、今年度は内容を増やし、楽器演奏を加えての参加を検討中との事であった。利用者の楽しみや生きがいと一段と向上するよう、ぜひ計画が実現することを期待する。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括支援センター主催の認知症教室に講師として参加したり、施設の見学会の時などに話しをさせていただいている。 地域の方から家族の事で相談に来る方もいる。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議内で意見・要望などを聞くようにして、そこでの内容を職員会議などで話し、周知徹底してサービスの向上になるよう努めている。	2ヶ月に1回開催し、行事予定の確認、イベントの参加案内、過去に開催した行事の報告などを行なっている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	困った時などは電話等で相談するようにしている。 地域包括支援センターとも連携を密にしている。	困りごとにはすぐに相談したり市内のグループホーム責任者会議を立ち上げる際に相談を受けるなど行政との連絡は密に取り合い、協力関係を築いている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束マニュアルに従い、理解すると同時に、安易に身体拘束しないよう周知徹底している。 職員の研修会や会議などでも話をして再確認している。	身体拘束は、しない事となっているが、万一必要な場合は、マニュアルに沿い、家族との相談で了解を取る事となっている。日常、玄関は施錠していない。利用者が外に出る時は、職員も一緒に出掛けるようにしている。問題行動が起こる場合には、その兆しが見えるので生じる前に対応している。スピーチロックについては、ほとんど事例はないが、あった場合には、事務所に呼んで直ちに注意している。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員研修会や会議などで話をして虐待(身体、言葉)がないように職員教育をしている。 職員間でも振り返りをする機会を設け話し合うようにしている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	まだまだ理解が不十分な面もあるので、これからも理解を持ち皆で話し合っていきたい。 以前は成年後見制度を使っている利用者がいたが、今はない。今後も制度を使う方いたら我々も学びながら活用出来るようにしていきたい。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族とは電話連絡なども極力行い、入所してからも不安な点などは気軽に話が出るような環境作りをしている。 どんな事をするのにも話し合いをするよう心掛けている。			

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名( )	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議の時や、来訪時に気軽に話ができるような環境作りに努めている。また玄関に意見箱を設置して、要望・苦情等を記入してもらっている。 要望等に関しては、極力速やかに対処するよう心掛けている。	日常で利用者と、行きたい処、食べたいものを話し、要望に沿うよう努めている。家族には、面会時に気軽に相談してもらえぬ環境作りに努めている。家族からの意見や要望は、申し送りノートに記入し、職員会議で検討後、可能な事は運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や日々の業務の中で、意見・要望等を聞き、働きやすいような環境作りを行っている。	日常的に気軽に話せる環境にある。職員からの提案により忘年会を計画し、精神的なストレス解消をしている。食事時に口腔体操の実施、利用者を交えた手作りケーキ作りなどの提案を実践に結びつけている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員が気持ちよく働けるような配慮を行っている。 能力・やる気に応じた昇給も行っている。 また、休暇希望等も考慮して勤務表を作成している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年4回職員の内部研修、月1回の職員研修会を行い、技術の向上に努めてもらっている。職員が講師を行うのも相互の勉強の場になっている。 また、施設数も多いため、それぞれ独自の勉強会もあり意見交換を行っている。外部の研修会にも参加出来るようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人内にいくつもの施設があるので、内部での交流研修は積極的に行っている。過去には他施設研修も行ってた。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前の聞き取りや、入所後も要望等も聞き考慮したケアを心がけている。 そのために日頃から、コミュニケーションをとり信頼関係を気づくような努力をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所前の聞き取りや、入所後も要望等も聞き考慮したケアを心がけている。 何かあれば電話連絡等でも近況を報告して何でも話ができるような関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	柔軟な対応を常に心がけ、利用者にとって何が最適な選択か考え行うようにしている。 今は訪問リハビリを希望する家族がいるので、活用している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を楽しんでいる	家庭的な雰囲気作りを心がけ自分や自分の親が住んでも安心して預けられるような環境・関係作りに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名( )	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	普段の面会以外に、行事の時に家族を呼び一緒に過ごしてもらうように配慮して行っている。 家族と共に利用者をケアしていければ良いと考えているが、家族によっては温度差があるのでその差を埋めていけるよう今後も努力していきたい。先日家族と買い物ツアーにも行って来た。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	個別外出の時や散歩時になじみの場所に行ったり、面会等で知り合いが来た時には、長居しやすい空間作りを心がけ本人のためにも気軽にまた来てもらえるよう配慮している。	会社の同僚が来所されたり、利用者の勤めていた会社を訪問して従業員との友好を深めていた。家族の結婚式に出席したり、小瀬スポーツ公園やバスハイクで元住んでいた所を訪れたりしている。地区社協主催の文化祭に作品を出したり見学に行くなど関係の継続を支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	家庭的な雰囲気作りを心がけ、縁あっての9名で生活しているのでこのメンバーで何年も生活できるようにしたい。 そのために皆でいろいろな行事に取り組んでいる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	過去にも退去後も家族がお茶を飲みに来たり、退去後相談に来たりして法人内の施設に入所した事があった。 退去後も差し入れを届けてくれる方もいる。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	個別に話を聞いたり「その人らしく」過ごせるように配慮している。 自分で意志が伝えられない人は家族から希望を聞き対応するように心掛けている。	ケアマネジャーが作った連絡ノートがあり、スタッフは些細な事でもシートへ記入し、報告・連絡・相談している。利用者は誰でも自分の意思を伝えられ、ケアスタッフは、その些細な意思表出をキャッチする努力をしている。シニア会議があり、利用者同士で話す機会を設け約束事を作り、仲間作り、絆作りを実践している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前に聞き取りを行い、生活歴を把握して職員にも周知徹底してもらいケアに当たっている。 生活しているうちにここが家だと思ってくれた利用者もいた。これからも利用者のペースに合わせた支援を行いたい。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の生活パターンを把握して、その中で本人らしく生活出来るようなケアに努めている。 それでいて、居室に常に一人でいて孤立しないような配慮をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成の時に本人・家族の希望を反映出来るような計画にしている。 それが実践に移していけるような努力を続けたい。	計画の作成はケアマネジャーが担当し、2ヶ月に一回の職員会議・担当者会議で、利用者日常の状況を申し送りノートを参考にモニタリングし修正・変更を行なっている。会議に際し事前に家族の希望を聞いて会議に反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録を記入して、それを個々の介護計画にも反映したり処遇会議でも意見交換の材料としている。 職員間で気づいた事や、統一事項は申し送りノートに記入してケアに活かせるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名( )	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者の身内で不幸やお祝い事があった場合など、職員が付き添い一緒に参加したりサービスのイメージを決めつけないような配慮を行っている。 会社の社長だった利用者があるので、職員付き添いで会社を訪れたところ家族・従業員、本人も涙を流し喜んでくれた事がある		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域包括支援センターと連携を取ったり、地域住民とのかかわりで地域に溶け込みながら快適かつ安心・安全な生活が送れるよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人内にクリニックがある旨を家族に伝え、そこに移してもかまわない利用者は紹介状をもらい健康管理のフォローを行っている。 病院を変わずそのままの利用者も当然おり、家族との連携の中で受診等行い健康管理を行っている。	利用者・家族の希望により、事業所のかかりつけ医と以前からのかかりつけ医を受診している利用者があるが、受診時は全利用者共職員が対応している。歯科・眼科に関するも同様に支援している。入院の場合は家族に協力をお願いしている。急変時には救急車を要請し、法人のクリニックも利用している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	特変時などは介護職からリーダー→管理者に伝わり、その中で家族と相談して受診や対応等決めるようにしている。 また法人内に看護師も多いので相談したりしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際は病院との連携を密に行い、退院の許可がおりた時にはカンファレンスを行い速やかに対応出来るようにしている。 また入院中ADLが低下する事もあるので、介護計画等も変更しながら医師・看護師ばかりでなくリハビリの職員等からも情報交換を行うようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入院前に当然家族に伝えると同時に当法人にあるクリニックや特別養護老人ホームへの入居可能な旨は説明し広い選択肢の中で方向性を決めるようにしている。	終末期対応については、利用者・ご家族と相談し対応することとしているが、現状では、訪問医療の協力が難しく、実際に重度化・終末期を迎えた場合は対応支援は難しい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	最低年に一回は救急法の内部職員研修会を行っている。 それ以外に他事業所で主催する研修会にも参加し知識の向上に努めてもらっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に数回避難訓練を行い、利用者はもちろん職員の訓練を行っている。 年に一回は消防署に行き訓練を実施している。 職員の中にもそれぞれの地元で消防団に所属している職員もあり日常の中でも利用者や職員に話しをしてくれている。	火災の避難路は、各部屋のベランダから、ベットのマットを投げたその上に飛び降りる想定をしている。スプリンクラーは設置されている。車いす利用者は職員が抱えて避難することになっている。AEDの取り扱い方研修を実施している。災害の初期行動が重要と職員に徹底している。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	運営理念を玄関前に掲示し周知徹底を図り、その人らしく生活が出来るようにしている。 トイレや失禁した時の声かけなどにも配慮して行うよう会議等で徹底するようにしている。 今まで生きてきた生活歴も大事にするような工夫もしている。	研修で、風呂・トイレ・失禁等に関し注意を徹底している。まず声掛け挨拶し了解を得てから行動することが徹底されている。利用者間でのプライバシーに関する話があった場合には、職員が中に入って話しをそらすようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)	外部評価	
			ユニット名( )	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	その人らしく生活してもらう事を大切にして支援を行っている。 食事のメニューにしても自由に決めてもらう日を設けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	散歩や居室での読書に関してもその人のペースにあった支援を行っている。 テレビの好きな方は居室で余暇時間に見ていたり、生活の場というのを意識して支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	女性の利用者だと家族が持ってきてくれる化粧品や、衣服でオシャレな身だしなみをしている。 男性の場合は整髪・髭剃りの支援を行い、身だしなみに気を配るようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の手伝いが出来る方は行ったり、片付けを行ったり、メニューをホワイトボードに書く人やそれを読み上げる人など一回の食事で多くの利用者が関わられるようにしている。	メニューは利用者と一緒に考え、毎食ホワイトボードへ書き込んでいる。併設の施設の児童と交流を兼ね食事を楽しむ場を設けている。食材は男性利用者が職員と買い物に行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人一人の症状・状態に合わせた食事やおやつを提供を心がけている。 状態の悪い利用者には高カロリーな補食等を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行っている。一人ひとりのADLに応じた支援を行うようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人一人に合った時間のトイレの声掛けや、パット使用をしている。 基本的にオムツはしない努力をしている。 オムツ対応で入所された方も支援により、使用しなくても生活出来るようにADLも向上している。	排泄チェック表を活用し排泄パターンに合わせ誘導する。また、表情や仕草を見て誘導している。入院してレベルが低下しオムツ利用となってしまった利用者には、ポータブルトイレが利用できるように支援している。リハビリパンツは夜だけで、昼間は尿とりパットをして失禁しないように利用者の状況を観察している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬での対応はもちろんだが、極力薬を使用しなくても済むように水分・散歩・食事等配慮して行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は利用者にとって大事なので、その日の体調を考慮しながら希望に沿って行っている。	個室で、入浴時間は特に決められていない。入浴拒否のある利用者には声掛けや時間を変えて、週2回は入浴している。週4回入浴する利用者もいる。介助は同姓介助を基本とし、特に女性の利用者には配慮をしている。	

自己	外部	項目	自己評価(実践状況)		外部評価	
			ユニット名( )	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中睡眠をとる利用者もいたり、夜の睡眠につながるような日中の支援を行っている。 今現在9名全員の利用者が夜間よく休まれている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬は大事かつ危険なので取扱いに注意すると同時に、用法を理解したうえでやっている。 医務ノートなどで職員も内容を理解するようにしている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その人らしく生活出来るような支援を行っている。 ピアノが上手な人は合唱練習の時に弾いてもらったり、草取りが好きな人は職員と一緒に草取りに行ったり、縫い物が得意な方は雑巾等縫ってもらったり・・・等行っている。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	シニアの特徴として、外に外出する行事が多く、外的環境を他の施設(外部の)より多く提供している。 個別の買い物や小学校参観や自宅訪問など。	地域の商店街に出掛けたり、地域行事や事業所の行事など外出の機会は多く、希望に沿い支援している。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	9名のうち5名の方が、家族の同意のもと、少額をだが所持している。 自分で所持していない方でも、買い物の支払い等で払ったり買う楽しさをもってもらうようにしている。			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族に電話をして話をしたり、年賀状や暑中見舞いのハガキ等自らが行う事で刺激と同時に孤立感を防ぐような配慮をしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ハード面(建物・立地)を考えていても仕方ないので、その中でいかに「生活の場」らしさをだすかを考え、利用者で作成した工作や写真などを掲示して季節感や居心地の良さにつながるような配慮をしている。	掲示する行事写真を、どこに貼るか、どんな事があったかや、文章作りなど利用者と職員と一緒に作業をしている。貼り絵・吊るし雛、クリスマスツリーなど利用者と共に作っている。明るい雰囲気、就寝以外は部屋に入る利用者はいない。利用者が自分で座りたくなる椅子が用意されている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	フロアーや玄関前にソファを置いたりして対応している。 自分の居室に相手呼び話をしている利用者もいる。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	基本的に居室を提供して居室内は自由に使用してもらっている。 現状は女性の利用者は家具やなじみの物が多いが、男性利用者の場合は衣装ケースだけの殺風景な場合が多い。	家族が工夫した、部屋の表札が掛けられている。室内は利用者・家族の希望で馴染みの物や仏壇・タンスが持参され、その人らしい部屋となっている。明かりよけとして入口にカーテンが掛けられている。各部屋の入口の扉は障子の引戸で、家庭的な雰囲気となっている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	ワンフロアーでの空間で生活しているので生活しやすい環境にある。 それでもどうしても居室が分からない人がいるが皆で声掛けをして混乱しないような配慮をしている。			